

東京双松会会報

発行 東京双松会事務局（中央印刷事務器株式会社内）
TEL:03-3265-4858 FAX:03-3265-4859 URL:http://www.tokyo-soshokai.org/
印刷 中央印刷事務器株式会社

『国を想い、故郷を想い、母校を想う』

会長 芦田 昭充(第13期 昭和37年卒)

私はこの4月で遂に70歳という大台に乗りました。企業人としては47年目に入っています。この間多くの海外諸国を一応見てきました。この拙い経験に照らせば、日本という国は一般に思われているよりもずっといい国であると実感しています。

日本に住んでいるとこの国の良さが意外と解り難いかもしれませんが、自然については、四季があり、水資源に恵まれ、実に多様な作物の耕作に適しています。欧州などは国によっては種類が限定されています。また食物の自給率が41%ということで、農業は弱体化あるいは衰退化していると思われるかもしれませんが、実は農業生産額は世界第5位です。したがって、金額ベースの自給率は60数%です。一方、言論においても実に自由な国であります。社会的にも相対的には安全であり、貧富の格差も比較的小さい。文化においては、世界各国の文物（言語、文学、美術、音楽、料理）を受入れた上で独自に発展させています。政治的にも、成熟度、生産性は別として、かなり進んだ民主主義国と言えるでしょう。経済力は、GDPで中国に抜かれたとはいえ、世界第3位です。世界から好感をもたれる国としても日本は第4位です（BBC調査）。

しかし、この20年は停滞しています。この原因はいわゆる「3D」として表現されています。つまりDebt（国家財政の逼迫）、Deflation（デフレ）、Demography（少子高齢化）で、この退潮を転回せんとしているのがアベノミクスです。もちろん快刀乱麻を断つが如く一挙に達成することは無理で、大きな船が方向を変える時のように、じわじわと時間を掛けながら、しかし確実に実をあげ得ると思っています。

近隣国の中国、韓国の情勢はどうでしょうか？ 中国は習近平国家主席が、形式主義、官僚主義、快楽主義、浪費の4つの撲滅という事を主張しています。韓国の朴槿恵大統領は、学校暴力、性暴力、家庭内暴力、不良食品の4大社会悪の克服を唱えています。もちろん日本にもこれに類する問題はありますが、中国・韓国両国における度合いは、日本とは比較にならない程の悪影響があるということです。この外、中国では水不足でありながら、同時にこの貴重な水資源が汚染され、大気も同様に汚染されているということです。ちょうど40～50年前の日本の様です。経済成長のスピードを落としてでも環境問題が解決されることが重要です。韓国はウォン安をうまく利用して経済成長を実現しましたが、そのメリットは企業がより多く取り込み、一般国民は左程恩恵に浴していない面があります。この様に両国とも色々問題を抱えています。

次に島根県の良さについて触れましょう。まず人口1万人

あたりの保育園数は全国第1位、妊婦の健診公費負担は第5位、出生率は1.68で第2位、小中学生の朝食摂取率は第4位であります。一方、犯罪率は第42位、離婚件数は第44位と低い。但し、学力テスト成績は第33位と余り高くありません。日本酒の消費量は第9位と高い。総じて見れば中々良いところがあると思いませんか？

私は今年の5月に母の一周忌で大東町に帰りましたが、そのついでに以前から訪問してみたいと思っていた出雲市斐川町の荒神谷遺跡と加茂町の岩倉遺跡を訪ねました。前者からは、弥生時代の銅剣の全国出土総数約300本を上回る365本の銅剣が発掘されています。それから出雲大社にもお参りしました。境内の岩根の御柱（心の御柱）の巨柱を見ることができ、社伝に出てくる高さ16丈（約48メートル）を実感することができました。出雲は古代の中心であったことを再認識しました。

今年1月、錦織良成監督の『渾身 KON-SHIN』という隠岐島の古典相撲を題材とした映画を観ました。私は隠岐島にはまだ行っていませんが、風土、習慣、人々の素朴ではあるが心の底にある郷土愛などが巧みに表現されていました。隠岐島といえば、松江高校、北高とは直接関係はありませんが、私が社外取締役を務めているJFEホールディングスの馬田社長のお父様も隠岐島ご出身ということが最近分かりました。また、民主党の前原議員のお父様、公明党の佐藤議員（滋賀県選出）のご両親も隠岐島ご出身だそうです。

松江北高出身で活躍されている方々に最近お会いする機会があり、大変頼もしく感じました。北高現役も頑張っています。第50回島根県高等学校総合体育大会では3年連続で男子総合優勝を飾っています。

尚、商船三井関係で恐縮ではありますが、子会社の商船三井客船が運航する客船「にっぽん丸」が今年5月に境港に入港しました。勿論、松江や出雲大社などへの観光ツアーも盛り込まれています。「にっぽん丸」の他にも今後寄港が予定されている客船が19隻あるそうです。

色々な面で島根県が見直され、注目を浴び発展していくことを期待しています。

(株式会社 商船三井 会長)



平成24年度総会報告

台風18号の影響が心配されたものの幸い関東直撃を免れた平成24年9月30日(日)、市ヶ谷のアルカディア(私学会館)で第57回総会と懇親会が開催された。昭和17年松江中学卒業の大先輩から平成24年卒の学生の皆さんまで参加者は100名を超え、来賓として母校からは校長先生と校内幹事の先生、双松会からは会長と幹事長を迎え例年にも増して盛会となった。



山口琢磨大先輩による乾杯の音頭

平成5年卒の常松治郎さんと平成6年卒の山田将巳さんの司会で始まった総会は、まず泉宏佳事務局長(昭和38年卒)の開会の辞に続き芦田昭充会長が挨拶され、「週刊エコノミスト」の「名門高校の校風と人脈」と題する記事を紹介しながら松江北高出身者としての誇りを次のように述べられた。

同誌は全国の名門高校をシリーズで紹介しているが、平成24年9月18日付けで我が松江北高が11番目に採り上げられた。いずれ母校が登場するものと期待していたが、予想以上に早く登場して嬉しく思っている。このシリーズは政治、経済、文化の各分野で活躍したあるいは現在活躍している卒業生を紹介することにより、有為な人材を産み出す夫々の学校の土壌を探ろうという企画であるが、我母校はまず政治の面では若槻礼次郎、竹下登の2名の首相を輩出しており、首相を3人輩出している学習院は別格として、首相を2人出している高校は他に山口高校、高崎高校と私立麻布高校しかないと紹介されている。また、経済界、文化・スポーツ界でも数多くの卒業生が活躍しており、同誌では総勢33名が紹介されているので、一読をお奨めしたい。

次に河原一朗校長(昭和47年卒)が登場され次のように挨拶された。

平成24年4月に就任したばかりだが、双松会会員としては5人目の校長であることを誇りに思うとともに重責を感じている。本校の生徒たちは創立以来の校訓である「質実剛健」「文武両道」の精神の下、勉学はもちろん部活動、生徒会、ボランティア、地域交流などに意欲的に励んでいる。その結果、大学進学で優秀な実績を取るとともに、県高校総合体育大会でも常に好成績をあげ、文化面でも数々の全国大会に

出場して活躍している。私ども職員一同は今後とも校訓を受け継ぎ、生徒たちが高い知性と豊かな心情、強い意志を培い、心身ともに健康な人格を形成出来るよう、力を合わせて伝統ある北高教育に邁進して行きたいと思っているので、一層のご理解とご協力をお願いしたい。

続いて、庄司肇双松会会長(昭和35年卒)が次のように挨拶された。

平成23年11月に、母校の創立135周年記念総会が200名以上の参加者を得て盛大に開催された。また、芦田会長が触れられたように、週刊エコノミストに母校が採り上げられたことを大変誇りに思っている。2年前に植え替えた母校のシンボルである二本松が冬の寒さの影響なのか完全に枯れてしまったので、復活策について現在鋭意検討中である。なお、毎年双松会会員に配布している会報は予算不足で苦戦している。会員諸氏からの寄付を募ることになるので、よろしく協力願いたい。

来賓各氏の挨拶が終わったところで、泉事務局長の活動報告、前島紀夫会計担当幹事(昭和38年卒)の会計報告、島村武宜監事(昭和38年卒)の監査報告があり、満場一致で承認された。

続いて、演劇部出身の青砥洋さん(昭和36年卒)が「部活動の思い出」と題して講演され、NHK松江放送劇団から劇団「昴」、劇団「四季」を経て、児童劇団「大きな夢」を主宰するに至った人生を振り返りながら、現在全国24か所で500人の団員を擁する児童劇団を通じて、子供たちの情操教育に取り組んでいる思いを熱く語られた。(講演の内容については次ページの「寄稿」をご覧ください)



大岩篤郎さんのリードで校歌斉唱

総会に続く懇親会は、出席者最高齢の山口琢磨さん(昭和17年卒)の乾杯の音頭で始まった。山口さんは、その「航洋押船技術」で2010年には世界的な運輸技術のイノベーションに対して贈られる米国のスペリー賞を受賞された方で、会場でそのメダルを披露された(因みに、これは1966年の「東海道新幹線」に次ぐ日本人として2組目の快挙とのこと)。また、大岩篤郎さん(昭和42年卒)ご夫妻による歌の披露などもあって、懇親会は和やかなうちにお開きとなった。

寄稿

— 青砥 洋(第12期 昭和36年卒) —

『部活動の思い出—抄録』

左ページでも紹介したように、青砥さんからは松高の演劇部時代の話というよりは、長く演劇と共に歩んできた役者としての人生の一端を、面白くお話しいただいた。

私は灘町の生まれ。父は画家を目指して東京で勉強していたが呼び戻され、白濁小学校の真ん前でしぶしぶ画材店をやらされていた。けれども長男である私には「絶対、絵描きになれ」ということで、小学校1年の時から家に帰ると画材が用意してあった。描かされてはいたが、絵の才能は結構あったようで、小学校2年の時に描いた母の絵はアルゼンチンにまで行って評価され、周囲も将来を期待していた。

そのうち、油絵を描くのがつらくなってきた。そんなある日、柱時計が止まったので、今何時だろうと思ってラジオのスイッチを入れたら、NHK松江放送児童劇団員を募集していた。もしかしたら絵の世界から逃げ出せるかもしれないと思い、応募の書類を出したがうんとともすんとも言ってこない。既に何人かが合格したとの報道があったので、幼い少年は頭にきた。直ぐにNHKに電話したところ、聞きなれたさわやかな声で君の分だけが漏れていたと言われた。そんなバカなと、ますます可愛い少年は怒った。君だけオーディションをやるからと言われて喜んでNHKに行った。その当時NHKは床几山にあったが、一人でテストを受けた。金魚鉢のような調整室に入れられて、5~6人がいる中で初めて早口言葉を言わされた。それがきっかけで、私の熱意に打たれたのだと思うが、技術の上手い下手ではなくて入れてくれた。それが、私のこの業界に入るきっかけになった。当時、ラジオドラマに1本出れば500円位のギャラは出ていた。

松高を卒業するまで児童劇団に所属。松高入学時は、今日この会場にいらっしゃる先輩の古瀬さん(女性)と一緒にラジオドラマをやっていた。松高に入学後、父が死去。演劇部に所属し生徒会の役員もこなし、NHKの出演料で松高も無事卒業でき、その後、新赴任のNHKプロデューサーのついで上京し、当時のラジオ人気番組「一丁目一番地」でプロデビュー。だが「劇団民芸」には門前払いを喰らい、自らつくった劇団も解散した。その後、劇団「昂(すばる)」に所属、婚礼司会などのバイトをしながら、しばらくして退団。一度帰松した後、再度上京して「劇団四季」のオーディションに受かり、役者としての研鑽を積み、「李香蘭」や「女房学校」「オペラ座の怪人」などに出演した。

ある時に浅利先生とぶつかった。ぶつかったというよりも、たった一言いった言葉に先輩が横槍を入れてきて、とんでもない誤解を受けた。浅利さんというのは北朝鮮以上にワンマンな人で、自分の言うことに従わないとみんなクビ、自分の思うように人を動かしているが、とはいえ日本にこれだけミュージカルを普及させた功労者であることは間違いない。たった一言を誤解されて、3本ほど掛け持ちでやっていた仕



事を全部下ろすと言われた。私も負けず嫌いなので、お前の魂胆は分かっていると行って逃げて行くのをずっと追っかけて行ったが、何の説明もなくそのまま終わってしまった。回りの人からは土下座した方がいいと言われたが、こちらに非がないのになぜ土下座をしなければならないのかと思って、またこちらから身を引いた。

その後50歳になって、ついに『児童劇団「大きな夢」』の発足に至る。地域密着型の児童演劇活動を推し進め、平成20年には22公演をこなすまでに成長した。

私がやっている児童劇団は決してプロを育てるのではなく、飽くまでもミュージカルを通して学校教育では教わらない情操面を育ててくれたらな、と思ってやっている。いい加減ではなくて、本当にマンツーマンで本人のいいところを見出す、そういう指導をしているので、親から見ればあそこに子供を入れとけば安心だと、戸塚ヨットスクールと間違えられることが時々あるが、嫉は敵しいし返事をしないと直ぐに言うし、幼稚園児もいて大体20~30人単位で稽古をするが、本当に一言も私語がない。静かに稽古を見ている。でも休憩時間になるとギャーギャー言っているが、家庭でも出来ないような嫉を劇団がやってくれるということで、段々と広がっている。子供たちの舞台は決して上手くはないし、大人にかなうような演技はしないが、感動を呼ぶ。子供たちが一生懸命やっている姿を見て人々は感動する。うちでやっているミュージカルは、愛と優しさ思いやりをテーマにしているのだから、人間として今これが一番大切なんだということを思い起こさせるような演目でやっている。だから、子供も喜ぶし親も喜ぶ、しかも各地で公演をやるが親たちが興業を主催する、我々はスタッフワークで中味を作る、地元の親たちがチケットを売って興業を成功させる、それが上手く行って今広がっている。

(文責 長谷川隆義)

あおとよう プロフィール：1942年生。
ラジオ、舞台等で活躍し1993年に児童劇団「大きな夢」を結成。
著書：青砥洋と「児童劇団大きな夢」(CLUB BDP)

ふるさと巡りIN東京

出雲椿とポニーテールの少女「はな」

東洋の椿の種は18世紀に、イエズス会の修道士カメルによってフィリピンからヨーロッパに渡って妖艶な深紅の花を咲かせ、ヴェルディの傑作オペラ「椿姫」となって結実した。持ち帰った修道士の名によって、椿の花はカメラアと呼ばれるようになった。

一方、椿の名は日本ではすでに733年、『出雲国風土記』に登場している。中国では随王朝の第2代・煬帝(ようだい)の詩篇で「海榴」もしくは「海石榴」という漢字で登場しているが、海という字が使われたのは、日本から来たことを意味しているという。

この出雲国風土記に登場する八重垣神社は、素戔鳴尊(スサノオノミコト)と櫛稲田姫(クシイナダヒメ)を主祭神とし、今や「八岐大蛇」伝説の故事から縁結びの「メッカ」として賑わっている。境内正面には2本の出雲椿が地上で1本の幹になった「夫婦椿」が植えられ、境内2カ所にも同じく夫婦椿が配置されている。

2月中旬、土曜日の朝、雪交じりの寒風吹きすさぶ境内は、寝台特急「サンライズ出雲」で直行してきたと思しき「婚活組み」やカップルでござった返し、「鏡の池」では「良縁占い」で和紙と硬貨を手を持った人たちが、水面に浮かべようと周りを取り囲んでいた……。実は出雲と銀座、両



者の結びつきは意外に古い。時代は遡って江戸時代、徳川家康の江戸開府に伴う町作りには、家康の命により諸藩の大名が手伝普請に駆り出されたが、今の銀座7丁目～8丁目辺り一帯は出雲富田藩の堀江氏が担当することとなった。この辺りは出雲人が埋め立てた場所で、出雲の人たちも住んでいたため、江戸時代から昭和5年(1930年)までは「出雲町」と呼ばれており、新築なった歌舞伎座辺りは、杵築と呼ばれていた。

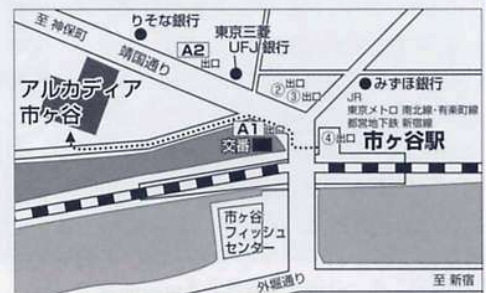
そして現在、銀座7丁目～8丁目の境の資生堂パーラー(東京銀座資生堂ビル)前の「花椿通り」には、出雲椿(ヤブツバキ)の木8本が植えられている。

銀座7丁目創業した資生堂は昭和初めの不況の折、出雲大社のお札を客に配ったところ、大国さまの御利益か、たちまち繁盛したという。その後毎年、出雲大社さんのお札を全国の販売店に配るようになり、カメラア(花椿)を社章とした。

資生堂の椿のマークは「香油花椿」というヒット商品によりつくられたもの。「花椿会」の命名も、八重垣神社の「夫婦椿」の、2本の幹がくっついて一体化した「一心同体」の愛の象徴にあやかっただけのもの。「花椿通り」は1993年、整備・改修が行われ、その記念として、椿の花を持ったポニーテールの少女「はな」の像が置かれている。銀座に立ち寄ったついでに、その可憐な姿にお目にかかってきてはいかがだろうか。

＝平成25年度 総会開催のご案内＝

1. 日 時／平成25年10月19日(土) 12:00～15:30
2. 会 場／アルカディア市ヶ谷(私学会館)
東京都千代田区九段北4-2-25
TEL.03-3261-9921(代表)
3. 参加費／8,000円(学生無料)
4. 申込〆切／平成25年10月4日(金)



編集後記

2年前から蕎麦打ちを習い始めたが、なかなか本職のように上手いいかない。その蕎麦教室にはもう10年も通っている人もいるというのだから、奥が深いものだと痛感している。それでも、一通りの道具を揃えて自宅でも楽しんでいる。先般、両親の墓参りに帰松した際に、実家近くにある蕎麦処「きがる」に立ち寄って割子そばを食べた。ついでに、同店自慢の蕎麦粉を分けてもらい持ち帰って自宅で打ってみた。もちろん、店のようにはいかないが、ふるさとの懐かしい「香り」だけは堪能できた。会報も第4号になった。同窓生の活躍の様子を見聞きするとつい自慢したくなるし、我がふるさとと東京との意外な繋がりに驚かされたりする。この会報を通じて少しでもふるさとの「香り」を味わっていただければ幸いである。(T.M)